

A29r 岡山天体物理観測所の現状とその将来

吉田道利、泉浦秀行、岩田生、沖田喜一、小矢野久、清水康広、長山省吾、柳澤顕史、大塚雅昭、尾崎忍夫、神戸栄治、黒田大介、戸田博之(国立天文台岡山)

岡山天体物理観測所は、国内に存在する大学共同利用光学赤外線観測所として、1960年以來約半世紀に渡って活躍してきた。その主力装置は188cm望遠鏡および観測装置群であり、現在、年間約230夜を共同利用に供している。

中小口径望遠鏡においては、少数の研究プロジェクトのための専用望遠鏡、あるいは機能を絞った単機能望遠鏡にしてユニークな天文学を推進する、というのが非常に有効な利用方法であることは論を待たない。しかしながら、一方、萌芽的研究推進、研究・教育基盤整備など、国内にあって手軽に使える中小口径の汎用望遠鏡に対する多くのニーズがあることも忘れてはならない。岡山天体物理観測所では、188cm望遠鏡をこうしたニーズに応える汎用望遠鏡として位置づけ、さまざまな観測モードに対応する観測装置を開発して共同利用に提供してきた。ただし、近年、2mクラスでも特徴ある天文学が推進できるように、長期プロジェクト枠やフレキシブルな時間割当てなど、時間軸を重視した共同利用形態を工夫してきている。こうした工夫から、系外惑星探査や恒星振動の研究などの分野で優れた成果が生み出されつつある。

共同利用の他には、他機関との協力により、50cm望遠鏡や91cm望遠鏡を用いた連携観測プロジェクトを展開している。また、188cm望遠鏡を用いて、東アジア諸国の2m級望遠鏡との系外惑星探査の国際協力を推進し、共同観測だけでなく、技術提供や人的交流なども積極的に行っている。

講演では、岡山天体物理観測所の共同利用および独自の活動の現状を紹介し、中小口径望遠鏡の有効活用という面から、188cm望遠鏡の将来像やこれからの国際協力の見通しなどについて考えてみたい。